

〔論文〕

# 幼稚園教育実習が学生に与える効果について ～卒業生対象のアンケート結果分析からの示唆～

多田 鈴子

## 要旨

本学では、総合保育学科において、所定の科目を履修し単位を取得することにより、幼稚園教諭第2種免許や保育士の資格を取得することが可能である。資格を取得する上で必ず必要とされるのが、教育実習である。

教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通じて、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する授業や実習である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育を体験的・統合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付けることを目的としている。

保育所保育指針の告示化に伴い、従来よりも、保護者支援や認定子ども園に代表される子育て支援に係る多様なサービス事業の展開が期待されている。保育者とは、乳幼児を保育する人のことで、一般には、業として、乳幼児、児童の保育に直接かかわっている者、保育士、幼稚園教諭の総称として理解され、子育てのスペシャリストである。このような時期に求められる子育てのスペシャリストの育成を目指す上では、教育実習の意義をどのように捉え、その展開法を考える必要がある。

卒業後、幼稚園教諭となり、現場に出た学生は、やがて、現場で実習生を受け入れる立場になることもありえる。指導する立場になった時、自分自身が、学生時代に経験した実習が自分自身に何を残したかや実習の学びを再度振り返る機会がやってくるのである。

今回、本学を卒業した卒業生を対象とし、学生時代の教育実習で学んだことが、どのように現場の実践で活かされているかを考察する。方法としては、事前に、アンケートシートを作成し、卒業生に送付、集約後卒業生本人とインタビューを行った。それらの分析を通して、在学時と卒業後での保育者としての保育観の変化や在学時に必要だったと考える学びの内容を明らかにし、これからの子育てのスペシャリストである保育者育成の課題を明らかにする。

## はじめに

2017年3月に改訂された幼稚園教育要領及び小学校指導要領においては、今まで以上に、幼児・児童の学びの連続性を視野に入れた内容が求められるようになってきている。本研究では、幼稚園教諭免許を取得するための教員養成のあり方に注目し、特に、学生時代に行った教育実習が卒業後の実践にどのような効果を与えているのかを明らかにする。そして、そこから、これからの教育実習に

関する指導上の課題についても考察したい。

子育てのスペシャリストである保育者を目指す上では、自分がどのような保育者になりたいかという自分の保育観の獲得が重要である。この保育観を形成する上で大きな影響を与えるのが、教育実習である。教育実習では、教員や現場の指導者から多くの指導を受けることがあり、それによって、学生の保育観の形成が行われるのである。

卒業後は、保育者として現場での実践に入るが、学生時代に形成した保育観が、経験年数を重ねる中で、どのように変わるかについては、本人が気づいていない部分もあると考えられる。

保育者像については、梅田優子（2012）は、「居心地の良さは、その子にとっての園生活が快適であるということでもある。もちろん毎日の生活の中では、その子どもにとって快適ではないと感じることも起こる。たとえば、友達と気持ちのすれ違いが起こって悲しい思いをしたり、自分の力ではどうにもならず悔しい思いをすることもあるだろう。これらは、子どもが育っていく過程で大切な体験である。ただ、そうしてゆらいでいる自分を見守ってくれたり、寄り添ってくれたりしてくれる保育者の存在があることによって日々いろいろなことがあるけれど、園での生活が全体として心地よいものとなっていくのではないだろうか。自分のありのままを受け入れられていることを子どもが感じていくことができるような保育者の温かいありようが大切である」<sup>1)</sup>と述べている。このように、保育者として欠かせない保育者の温かいありようという資質が見出せるのである。

現在は、2018年度から改訂された幼稚園教育要領や保育所保育指針等の施行、さらに、教職課程の再課程認定の時期とも重なり、現在は、まさに、幼児教育・保育全体の移行期の中にあるといえる。その意味では、将来を見越した教育実習指導のあり方が問われることになるのである。その1つの例としては、幼小接続の観点を基に大学での教育実習指導の検討を行った松永・森川他（2017）では、幼稚園教育実習指導の授業に関し、①幼小接続の系統性を重視した授業を取り入れること、②アクティブ・ラーニングを導入した学生同士の対話的な話題を促していくこと、③その中で、個々の学生の学びの筋道を捉え・構造的に評価していくことが求められているという展望を述べている。<sup>2)</sup>

本研究では、第1章では、幼稚園教育要領の動向について述べ、2017年に示された新幼稚園教育要領のポイントを説明する。第2章では、本学における教育実習のカリキュラムの変遷を述べ、2010年と2021年のカリキュラムの比較検討を行い、その違いや課題について考察する。第3章では、卒業生に対するアンケートおよびインタビューの分析を行い、学生時代の実習が卒業後にどのような影響を与えているかを明らかにする。第4章では、今後の教育実習のあり方について明らかにし、これから、保育者を目指す学生に対して、どのようなことを伝えていくべきかを明らかにしたい。

## 第1章 幼稚園教育要領の動向

### 第1節 幼稚園教育指導要領の内容

幼稚園教育指導要領とは、全国的に一定の教育水準を確保するとともに、実質的な教育の機会均等を保障するため、国が学校教育法に基づき定めている大綱的基準である。根拠となる法律規定は、学校教育法と学校教育法施行規則であり、その中で、保育内容に関する内容が述べられている。これらについては、文部科学大臣が定めると同時に、告示も行っている。

指導要領の構成は、第1章 総則（第1:幼稚園教育の基本、第2:教育課程の編成、第3:教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動など）、第2章 ねらいおよび内容（健康・人間関係・環境・言葉・表現）、第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項（第1:指導計画に当たっての留意事項<①一般的な留意事項、②特に留意する事項>、第2:教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項）となっている。<sup>3)</sup>

### 第2節 幼稚園教育指導要領の変遷

幼稚園教育指導要領については、概ね10年に一度改定が行われている。最初は、1948年に刊行され、保育要領とされた。内容としては、幼稚園・保育所、家庭における幼児教育の手引きが述べられている。その後、主な変更点として、2008年の改訂では、幼稚園教育要領の中で、幼小接続や預かり保育等の子育ての支援を充実させることが述べられている。そして、2017年の改訂では、幼小接続の重要性をより明確にする方向性が示されているのである。本稿では、2017年の改訂内容に注目して述べていくことにする。

### 第3節 2017年の幼稚園教育指導要領における改訂内容

2017年の改訂内容で注目すべき内容は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、幼稚園教育の基本を踏まえ、資質・能力を一体的に育むように努めるものと明示され、以下のような3つの点が示されたことである。

- (1) 豊かな経験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

さらに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、以下の10個を示している。

(1) 健康な心と体、(2) 自立心、(3) 協同性、(4) 道徳性・規範意識の芽生え、(5) 社会生活との関わり、(6) 思考力の芽生え、(7) 自然との関わり・生命尊重、(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、(9) 言葉による伝え合い、(10) 豊かな感性と表現

指導要領の中では、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものでなければならないとされている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、本人の習得目標ではなく、教える側のねらいや願いであると考えられる。

2017年の指導要領における第1章総則の改訂のポイントについては、以下のように整理することができる。

- 1) 環境を通して行う教育の推進。→これについては、今までの流れを引き継ぐ内容とする。
- 2) 幼稚園教育において育みたい資質・能力を明確化。
- 3) 5歳児修了時までには育ってほしい姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確化するとともに、小学校と共有することにより幼小接続を推進。
- 4) 幼児一人一人のよさや可能性を把握するなど幼児理解に基づいた評価を実施。
- 5) 言語活動などの充実を図るとともに、障害のある幼児や海外から帰国した幼児など特別な配慮を必要とする幼児への指導を充実。<sup>4)</sup>

## 第2章 本学における教育実習のカリキュラムの変遷

### 第1節 本学における教育実習に関するカリキュラムの内容

本学においては、幼稚園教諭の資格取得のために、現在、教育実習Ⅰと教育実習Ⅱが配置されている。教育実習Ⅰは、1年次を対象とし、教育実習Ⅱは、2年次を対象としている。カリキュラム上、Ⅰで基礎を学び、Ⅱは、Ⅰで学んだ内容をさらに深めることを目的としている。教育実習Ⅰは、通年で、教育実習Ⅱは、前期のみの開講となっている。実習については、2年間で5回の実習を行うものとし、各10日間ずつの合計50日間となっている。1年次は9月、2年次は6月に学外集中実習が組まれている。実習場所は、幼稚園が2回あり、それ以外は、保育所・乳児院・児童養護施設・障害者(児)施設のいずれかに実習に行き、5回目の実習は、本人の希望する施設で実習を行うことが可能となっている。

### 第2節 本学における教育実習に関するシラバスの内容

ここからは、教育実習Ⅰおよび教育実習Ⅱの内容について、2010年と2021年のシラバスの内容を

説明する。

図表1 教育実習Ⅰシラバス(2010年)

<p>&lt;開講時期&gt; 1年次(通年&lt;前期・後期&gt;)</p>
<p>&lt;開講形式&gt; 実習</p>
<p>&lt;授業回数&gt; 30回(前期15回・後期15回)</p>
<p>&lt;授業概要&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 自分自身の生活態度を見直し、幼児教育者をめざす心構えを養う。</li> <li>2) 幼稚園・保育園・福祉施設の見学実習を行う。</li> <li>3) 幼児の実態を観察し理解する。</li> <li>4) その都度、報告書を作成し、9月の学外集中実習に向けて、幼稚園教諭となるための生活態度の充実と心身の練磨を図る。</li> <li>5) 同時に、専門用語の理解や実習日誌の書き方を習得する。</li> </ol>
<p>&lt;授業計画&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. オリエンテーション・実習調書の作成</li> <li>2. 幼稚園の概要・教育実習の意義</li> <li>3. 教育実習の目的・実習の種類</li> <li>4. 実習の基本事項・見学実習の意義</li> <li>5. 見学実習</li> <li>6. 見学実習事後報告会</li> <li>7. 事前指導(実習日誌の書き方)</li> <li>8. 事前指導(実習の心得)</li> <li>9. 実習実践学習①(教材研究)</li> <li>10. 実習実践学習②(教材研究)</li> <li>11. 実習実践学習③(教材研究)</li> <li>12. 実習指導案の作成①(部分指導案)</li> <li>13. 実習指導案の作成②(部分指導案)</li> <li>14. 実習全般確認事項</li> <li>15. 総括(試験を含む)</li> <li>16. 実習調書の作成(2年実習に向けて)</li> <li>17. 事後指導①(事後報告会)</li> <li>18. 事後指導②(事後報告会)</li> <li>19. 実習実践学習①(理論)</li> <li>20. 実習実践学習②(理論)</li> <li>21. 実習実践学習③(研究発表)</li> <li>22. 実習実践学習④(研究発表)</li> </ol>

23. 教材研究①（2年実習に向けて） 24. 教材研究②（2年実習に向けて） 25. 教材研究③（2年実習に向けて） 26. 実習記録 徹底指導① 27. 実習記録 徹底指導② 28. 実習記録 徹底指導③ 29. 教育実習の本質・まとめ 30. 総括（試験を含む）
<評価方法> 定期試験・提出物・授業出席状況および参加態度などで総合的に評価します。

図表2 教育実習Ⅱシラバス（2010年）

<開講時期> 2年次（半期<前期のみ>） <開講形式> 実習
<授業回数> 15回（前期15回のみ）
<授業概要> ① 1年次の学外実習の経験を活かし、確かな幼児理解と援助の仕方を身につけるため、計画性のある日課と学業の実行に努める。 ② 6月に行う学外集中実習に向けて、各自が実習課題を設定し、主体的に総合実習や研究保育の準備を行う。 ③ 集中実習後は、卒業後の進路に向けて、擬似採用試験や論文分指導等、専門職としての知識や職業観を身につける。
<授業計画> 1. オリエンテーション・実習調書の作成 2. 6月本実習の理解と準備・書類作成 3. 実習指導案の作成①（部分指導案） 4. 実習指導案の作成②（部分指導案） 5. 実習事前訪問の心得再確認 6. 実習オリエンテーション 7. 事前指導① 8. 事前指導② 9. 学外集中学習①（幼稚園） 10. 学外集中学習②（幼稚園） 11. 事後指導①（事後報告会） 12. 事後指導②（事後報告会）

13. 専門職の意義 14. 幼稚園面接の意義 15. 総括（試験を含む）
<評価方法> 定期試験・提出物・授業出席状況および参加態度などで総合的に評価します。

図表3 教育実習Ⅰシラバス（2021年）

<開講時期> 1年次（通年<前期・後期>） <開講形式> 実習
<授業回数> 30回（前期15回・後期15回）
<授業概要> ① 教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する授業・実習である。 ② 一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身につける。
<学生の到達目標> ① 幼児や学習環境等に対して、適切な観察を行うとともに、学校実務に対する補助的な役割を担うことを通して、教育実習園の幼児の実態と、これを踏まえた学校経営及び教育活動の特色を理解する。 ② 大学で学んだ領域や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を保育で実践するための基礎を身につける
<授業計画> 1. 教育実習の意義・目的・内容について理解する 2. 各実習における目的・内容を理解し、教育現場で活用することの自覚と責任を確認する 3. 幼児理解を深め、教育実習の心構えについて理解する 4. 実習指導案の立案方法と実習日誌（記録）を書く目的とその方法を学ぶ 5. 幼稚園の理解①（幼稚園教育要領を中心に学び、幼稚園の実際を理解する） 6. 幼稚園の理解②（一人一人にあった指導、幼児の実態を踏まえた教育活動を理解する） 7. 幼稚園の理解③（実際の教育現場を見学し、幼稚園教育における環境を学ぶ） 8. 幼稚園の理解④（見学会で学んだことをまとめ、グループディスカッションを行う） 9. 実習日誌（記録）の作成方法を学び、その活用法を理解する 10. 実習指導案の立案とその書き方について学び、環境を通して行う教育の意義について理解する 11. 模擬保育の実施①（実習指導案に沿って、保育指導のシュミレーションを行う）

12. 模擬保育の実施②（実習指導案に沿って、保育指導のシュミレーションを行う）
13. 実習園でのオリエンテーションに参加し、実習園と子どもの実際について理解を深める
14. 教育実習計画について、グループディスカッションを通して、多面的に検討する
15. 各自の実習目標や問題意識を明確化し、実習の課題を探る
16. 教育実習の総括①（実習の体験を通して考察したことをレポートにまとめる）
17. 教育実習の総括②（実習の体験を通して考察したことをレポートにまとめる）
18. グループディスカッション①（幼稚園での実習体験を報告し、共有する）
19. グループディスカッション②（幼稚園での実習体験を多面的に検討する）
20. 教育実習報告会①（他の学生の実習園や実習についての発表を聞き、理解を深める）
21. 教育実習報告会②（幼稚園実習の意義を明確にし、今後の進路の課題を設定する）
22. 教育実習報告会③（教育実践研究の基礎的な能力と態度を身につける）
23. 個人面談①（実習園からの評価を知る）
24. 個人面接②（自己評価と反省を行い、課題をさらに明確化する）
25. 個人面接③（自分自身を多様な角度から検討して客観化を図る）
26. 個人面接④（今後に修得が必要な知識や技能を考え、自己目標を設定する）
27. 教材研究①（幼稚園教育における教材の必要性を知る）
28. 教材研究②（幼児の発達に関した教材について理解し、深める）
29. 教育実習における自己評価（目標に対しての自己評価を行い、実習評価を検討する）
30. 今後の学習についての総括を行い、2年次における学外実習に向けての確認を行う

<評価方法>

実習後の教育実習評価表に基づいて実習生を評価（50%）し、さらに、事前・事後指導の講義において実施する各種課題レポート（50%）と合算して評価する。

<事前・事後学習>

事前学習では、教育実習生として幼稚園の教育活動に参画する意識を高めておくこと。  
事後学習では、教育実習を経て得られた成果と課題等を省察するとともに、教員免許取得までに習得すべき知識や技能等について理解すること。

図表4 教育実習Ⅱシラバス（2021年）

<p>&lt;開講時期&gt; 2年次（半期&lt;前期のみ&gt;） &lt;開講形式&gt; 実習</p>
<p>&lt;授業回数&gt; 15回（前期15回のみ）</p>
<p>&lt;授業概要&gt; ① 教育実習として遵守すべき義務等について理解するとともに、その責任を自覚したうえで意欲的に教育実習に参加する。</p>



② 教育実習を通して得られた知識と経験を振り返り、教員免許取得までにさらに習得が必要な知識や技能等を習得する。
<p>&lt;学生の到達目標&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 幼稚園教育要領及び幼児の実態等をふまえた適切な指導案を作成し、保育を実践することができる。</li> <li>2. 保育に必要な基礎的技術（話法、保育形態、保育期間、環境構成など）を実施に即して身につけるとともに、幼児の体験との関連を考慮しながら適切な場面で情報機器を活用できる。</li> <li>3. 学級担任の役割と職務内容を実施に即して理解している。</li> </ol>
<p>&lt;授業計画&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教育実習の概要と意義の再確認（教育実習の年間計画・指導体制・手続き・日程など）</li> <li>2. 教育実習生が遵守すべき義務について理解する</li> <li>3. 実習日誌（記録）の記入及び観察視点について学ぶ</li> <li>4. 環境を通して行う教育の意義及び教師の役割を理解する</li> <li>5. 実習園でのオリエンテーションに参加し、実習校と子どもの実際について理解を深める</li> <li>6. 実習園の方針・特色をまとめ、実習課題に即して、保育指導計画・実習計画を作成する</li> <li>7. 各自の実習目標や問題意識を明確化し、実習の課題を探る</li> <li>8. 教育実習の総括（実習での気づきや成果・課題を今後の学習と実践につなげる）</li> <li>9. グループディスカッション（実習園や実習に関して報告し、実習体験を共有する）</li> <li>10. 教育実習報告会①（他の学生の実習園や実習に関しての発表を聞き、理解を深める）</li> <li>11. 教育実習報告会②（各自の幼稚園実習の意義を明確にし、進路の課題を設定する）</li> <li>12. 個人面談①（実習校からの評価を知る）</li> <li>13. 個人面談②（自分自身を多様な角度から検討して客観化を図る）</li> <li>14. 学習計画・実習計画について、グループディスカッションを行う</li> <li>15. 教育実習の本質を知り、理解し、今後の進路に向けて総括を行う</li> </ol>
<p>&lt;評価方法&gt;</p> <p>実習後の教育実習評価表に基づいて実習生を評価（50％）し、さらに、事前・事後指導の講義において実施する各種課題レポート（50％）と合算して評価する。</p>
<p>&lt;事前・事後学習&gt;</p> <p>事前学習として、1年次の教育実習を振り返り、自己課題を挙げておくこと。          事後学習として、教育実習を経て得られた成果と課題等を省察するとともに、教員免許取得までに習得すべき知識や技能等について理解し、習得すること。</p>

### 第3節 2010年と2021年のシラバスの比較

教育実習ⅠおよびⅡの授業内容（シラバス）の違いは、以下のようである。

#### (1)「実習記録 徹底指導」と「個人面談」

新旧の授業内容を並べてみると、その違いは一目瞭然である。特に目を引いたのが、実習終了後の授業内容である。旧の授業では「実習記録 徹底指導」という、教員の意気込みが感じられる授

業が目をついた。ほぼ同時期に新の授業では、「個人面談」が4時限も組まれている。実習が終わり、仕上げの段階とでもいうべき授業内容の方向が真逆な感じを受ける。もちろん、新旧共に教員の眼差しは、学生にしっかり向けられている。旧の授業は、職業人として必須の記録が書けるようにという目標が見える。新の授業では、職業人としての土台である人間的成長に重きを置いているように思える。つまり、職業人のスキルに焦点が当たっているのか、職業人の土台に焦点が当たっているかの違いである。

このような違いが生まれる背景は、まさに学生の土台である人間的成長の部分が十分でないこと、職業選択の意識の違い、生活経験の差などがあるように思う。これらのことは原因としてバラバラに存在するのではなく、相互に関連している。保育士、幼稚園教諭になることを考えていても、昔のように地域で小さい子どもと関わることも少ない。さらに職業選択も子どもが好きだから、かわいいからといった「ふわっとした」選択理由で職業に対する意識が十分ではない。さらに、近年重要視される自己決定に見られるような、自分の気持ちは何よりも優先するということも関係していると思う。何かにつまずいて、辞めたくなるということはよくあることだが、「辞めたい」と思えば、自己決定の結果として周りも留めない。このことは、将来のイメージ（なりたい自分の像）の薄さと相まって、様々なことへのトレランスを低めてしまい、人間的成長を不十分なものにしてしまう。

したがって、教育実習での学びを個々人に合わせて丁寧に幼稚園教諭としての自分というイメージをしっかり持たせる必要がある。それがゆえに、新の授業内容では、職業人としてのイメージがある上で効果的な学びとなる「知識・技術」に関する授業が旧の授業内容に比べて少なくなっていることが指摘できる。

## (2)「教材研究」と「模擬授業」

実習中の授業の方法を教えるという授業内容でも大きな違いが見受けられる。実習でどのような授業を行なうかという点で、旧の授業内容では「教材研究」に多くの時間を割いている。その一方で、新の授業内容では「教材研究」には、旧の授業内容ほど多くの時間を割いておらず、代わりに旧の授業内容ではなかった「模擬授業」が行われている。

このことは、実習先での授業において、旧の授業内容では、「何を教えるのか」が重要視され、新の授業内容では、「何をどのように教えるのか」が重要視されていると言えよう。

一見すると、どちらも授業技術についての内容とも考えられる。教育実習Ⅰは、初めての教育実習に臨む前、臨んだ後の授業である。教育実習に臨む前、実習できちんと授業ができるかどうか学生は「不安」にかられる。

旧の授業内容は「何を教えるか」であるので、授業内容さえ決まればあとは、学生が自分で“なんとかしよう”とする。新の授業内容は「何をどのように教えるのか」であるので、何を教えるのかが定まっただけでは、どうやって授業をすればいいのか分からない。学生が自分で“どうもできない”のでどのようにすれば良いかまで教える必要がある。

この“なんとかしよう”と“どうもできない”の違いを一言で言えば、「自信」の有無である。

その自信というのは、なんとかできるという自信である。前項で指摘したように現在の学生は、幼稚園教諭としてのイメージがハッキリしてない。そのため、なんとかできるという自信がないので、「どのように教えるか」まで教えなければならないことになる。

本来、実習なので、自分自身で考えて、授業実践を行うとよいのであるが、失敗して、立ち直れるかどうか分からないことで、学生も取り組むことに不安を抱くのである。そのためには、学生の教育実習での実践を後押しするためにも、模擬授業は欠かせないものになる。

### (3) グループディスカッションの重視

新旧を対照すると、新の授業内容に「グループディスカッション」が多くみられる。2012年に中央教育審議会からいわゆる「質的転換答申」が出された。質的転換答申とは、学生が主体的に問題を発見し、解を見だしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換の必要性を求めたものである。その結果、大学の授業においてもアクティブ・ラーニングが導入された。グループディスカッションもアクティブ・ラーニングの一つの形態である。そのような教育をとりまく社会情勢のなかで、グループディスカッションが導入の後押しをしたと思われる。

グループディスカッションは、様々な意見や考え、見方が交錯する「場」でもある。つまり、学生は、一つの事象から多様な意見やものの見方を知ることになる。このことが、学生の「自信がない自分」、「できない自分」という一面的なものの見方を変容させる、あるいはまた違った一面もあるのではないかという認識の幅を広げることにつながる可能性がある。具体的には、失敗したことをグループディスカッションで発表した時に、他にできていたことや失敗してしまったけれどそれまでの努力の過程などを指摘されることで自分の行いを再評価してもらえる。このことは、できない自分から、できる自分、努力した自分という自己イメージがプラスに転換する可能性を含んでいる。旧の授業内容にグループディスカッションがないのは、社会情勢が異なることはもちろんであるが、学生個々が個人として確立されていて、その必要がなかったということも考えられる。

### (4) 学生（学習者）に対する学ぶイメージの明確化

2010年（旧）と2021年（新）の授業内容（シラバス）を比較すると、いくつかの違いがある。第1は、学生の到達目標の項目の追加である。これに目を通すことで、講義を受ける学生が、その目的をより理解しやすくなるのである。第2は、事前学習や事後学習の項目を設けることで、講義を受ける学生にとっては、理解の学習のイメージが持ちやすくなることで、実習への動機づけが行えるのである。

教育実習ⅠおよびⅡに関する2010年と2021年の授業内容について比較検討を行った結果、旧の授業内容では、「職業人としての学び」を達成するための授業内容が、新の授業内容では、職業人の土台となる「人としての学び」と職業イメージを膨らませることと並行しながら行なっているということが言えるだろう。課題としては、現在の学生が抱える自身への信頼の無さ、職業イメージの弱さといった問題をさらにクリアできるよう授業内容をさらに進化させる必要がある。

本学には、外部からの進学だけでなく、内部進学として、付属の大阪城南高等学校出身の学生

も在籍している。この大阪城南高等学校を卒業した学生については、保育を選ぶ理由として、「自分が素敵な優しい先生に出会って、その先生になりたいと思った」と挙げる人が多かった。つまり、明確な要素とは言えないが、保育観を作るかすかな土台が学生時代を通して存在していたことが指摘できるのである。それが、これから目標とする先生像へと成長するのであり、この先生像を明確にしていくことも必要となる。

ここで、これから考えるべき課題を2つ示しておきたい。1つ目は、保育士と幼稚園教諭の違いである。保育士は、児童福祉法に基づく国家資格を持ち、0歳の乳幼児からの子どもを世話する役割であるのに対し、幼稚園教諭は、教育職員免許法に基づく教員免許を持ち、3歳の幼児からの教育的指導を行う役割が求められている。そして、保育士の資格は一生使える国家資格であるのに対し、幼稚園教諭の免許には、更新期限があり、定められた期間内に更新の必要があるとされている。そのため、保育園は「生活の場」、幼稚園は「教育の場」と区別されてきたが、近年では、保育園でも幼児教育を行う場合や認定こども園の創設に伴い、保育園と幼稚園を一体化する動きがあり、両者の違いは狭まってきているのが今日の状況である。学生の立場からすると、先生という言葉でこの両者を含むこともできるが、専門職としては、幼稚園教諭として、教育するという視点を持った教育者観も持ち合わせる必要があると言えるのである。

2つ目は、学生の自己肯定感を高める取り組みの確立である。自己肯定感や自信のない学生にとっては、グループディスカッションの場で発言をすることは、大きなプレッシャーや心理的負担となる。「もし、自分の発言が間違っていたらどうしよう?」や「他の人から賛同や支持されなかったらどうしよう?」という不安を持ち続けることで、授業への参加意欲が低下してしまう危険性がある。それを回避するためには、学生本人が発言することに重点を置くだけでなく、その場にいることで何かを感じる経験を積み重ねることが必要である。発言はしなくても、他の人が述べている意見を記録する書記のような役割を行ったり、他の人が話している様子を見たり、聞いた意見を自分の中で整理することから始めると良いと思われる。何も役割がないという状況を避け、自分で最初からすべて役割を完全に行おうとするのではなく、一つずつできることを増やそうとする気持ちを学生自身に持ってもらうことが大切である。そのためには、グループディスカッションを担当する教員側にも、ファシリテーターやコーディネーターとしての役割が求められるのである。

### 第3章 卒業生へのインタビューからの示唆

#### 第1節 卒業生に対するインタビューの内容

インタビューの対象者は、すべて大阪城南女子短期大学附属幼稚園に勤務する本学の卒業生9名とし、アンケートシートの項目は、以下の9項目とした。

① 対象者について

インタビュー対象者の内訳は、「2017年卒業生（実務年数5年目）」が3名、「2021年卒業生（実務年数1年目）」が2名、「2002年卒業生（実務年数20年目）」が1名、「2004年卒業生（実務年数18年目）」が1名、「2016年卒業生（実務年数6年目）」が1名、「2019年卒業生（実務年数3年目）」が1名である。

② 現在の受け持ちクラス

現在の受け持ちクラスは、「4歳児（年中クラス）」が3名、「3歳児（年少組）担任」が1名、「5歳児（年長組）」が2名、「2歳児クラスの副担任とあずかり保育の副担任」が1名、「フリー・送迎バス担当」が1名である。

③ 短大の教育実習Ⅰ・Ⅱの授業で印象に残っていること<複数回答を含む>

教育実習Ⅰ・Ⅱの授業で印象に残っていることは、「日誌・指導案の書き方（記入例）」が3名、「設定保育の話」が2名、「講義の最初に教えてもらった手遊びや歌」が1名、「自然物を使った作品づくり」が1名、「芝田先生の講義における保育園のエピソード」が1名、「実習生の志し」が1名、「特にない」が1名である。

④ 実習で辛かったこと<複数回答を含む>

実習で辛かったことは、「日誌を書くこと（書き直しも含む）」が9名、「設定保育」が1名、「現場に行くこと」が1名である。

⑤ 実習で自分が変わったかどうか

実習で自分が変わったかどうかについては、「変わった」が9名、「変わってない」が0名である。変わったと思うことについては、「自分に自信がついた」、「子どもと関わることで、笑顔でいることが多くなった」、「保育者の姿が学べた」、「責任感の必要性を感じた」、「保育に対する考え方」、「実習でしか学べないことを感じた」、「実践することの大切さ・挑戦することの大切さ」、「何事にもめげない力」、「繰り返しをし、次はどのように活かせるかを考えるようになった」が各1名ずつである。

⑥ 実習で何を学んだと感じるか<複数回答を含む>

実習で何を学んだかについては、「先生たちの動きや先生の子どもに対する声かけ」、「子どもたちへの関わり方」、「保育の流れ」、「子どもの一人一人の特性」、「保育者の援助」、「保育の複雑さ」、「保育者の子どもへの対応・声かけ」、「子どもの一人一人への細やかな声かけと配慮」、「保育の考え方」、「言葉かけと子どもの目標になること」、「先生の意見やアドバイスを聞くこと」が各1名ずつである。

⑦ 実習の経験が仕事に活かしているかどうか

実習の経験が仕事に活かしているかどうかは、「活かしている」が9名、「活かしていない」が0名である。活かしていると思うことは、「内容は限定できないが活かしている」が2名、「完璧ではないが活かしている」、「日誌の書き方、子どもたちとの関わり方、保育の仕方」、「基本的な子どもの生活習慣を学んだこと」、「学生に自分の実習時の経験を伝えていること」、「保育者と子どもとの関わり方」、「声のトーンや子どもの注目を集める方法が分かるようになった」、「実習した経験」が各1名ずつである。

⑧ 仕事で大事に思っていること<複数回答を含む>

仕事で大事に思っていることは、「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」が2名、「子どもが自分で考えたり、考えたことを行動に移すこと」、「自分が自覚を思っ命をあずかっていること」、「保育士であることを忘れないこと」、「子どもたちと笑顔いっぱい遊んだり、関わったりすること」、「保育士であることを忘れないこと」、「子どもが第一で、真面目に誠実に素直に仕事に向き合うこと」、「子どもの安全と心の安定（安心感）」、「自分自身が一緒に楽しむこと」、「子どもとたくさんコミュニケーションを取る」、「全体を見ること」、「一人一人をみること」、「子どもだからとあまり言いすぎたりやりすぎたりしないこと」、「業務が忙しくても、手を止めて、子どもの話を聞くこと」、「子どもたちの気持ちを理解し、やりたいと思えるような環境を整えること」が各1名ずつである。

⑨ 実習生に伝えていること

実習生に伝えていることについては、「先生たちの動きをしっかりと見て学ぶこと」、「初めは、誰でも失敗するから、色んな経験を積んでいくこと」、「子どものために、物を考えること」、「言葉遣いを意識すること」、「自分自身がまず楽しむこと」、「何でもすぐ聞くこと」、「全体を見ること」、「偏見を持たないこと」、「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」、「長所を活かせる声かけ」、「一人で解決しようとせず、誰かに相談する」、「人との関わり方（子ども・保護者・先生）」、「失敗しても良いので、何事にも挑戦してみること」、「実習生は担当したことがない」各1名ずつである。

## 第2節 卒業生のインタビュー内容に対する分析

インタビューの対象者は、9名であり、実務年数は、1年目から20年目までの幅広い期間があり、最多は、5年目が3名であり、全体の3分の1を占め、次に、1年目の2名としている。

インタビューを通じて明らかになったことは、以下のようにまとめることができる。

- ① 現在のクラスは、4歳児が3名、5歳児と3歳児が2名ずつ、2歳児が1名であり、フリーは1名であった。インタビュー対象者は、1名を除き、クラスの受け持ちを有していることがわかった。
- ② 短大の教育実習Ⅰ・Ⅱの授業で印象に残っている内容は、日誌・指導案の書き方が3名で最多であり、次に、認定保育の話が2名となった。その他には、講師の先生からの保育園のエピソードや授業中での作品づくりや授業で教えてもらった手遊びや歌が示されていた。
- ③ 実習で自分が辛かったことは、9名全員（100%）が「日誌の作成」と回答していた。それ以外としては、認定保育と現場に行くことが示されていた。
- ④ 実習で自分が変わったかどうかについては、9名全員（100%）が「変わった」と回答していた。その内容としては、自分自身に自信がついたや保育者としての責任感の必要性や何事にもめげない力や実践することや挑戦することの大切さや振り返りをし、次に活かせるかを考えるようになったがあった。
- ⑤ 実習で何を学んだかについては、保育の複雑さへの気づきや子どもの一人一人への細やかな声

かけと配慮が多かった。それ以外には、先生の意見やアドバイスを聞くことや子どもの目標になることがあった。全体として、保育者として子どもとどのように対応すべきかを学びとした内容が多かったと考えられる。

- ⑥ 実習の経験が仕事に活かしているかについては、9名全員（100%）が「活かしている」と回答した。活かしていると感じた内容としては、基本的な子どもの生活習慣を学んだことや保育者としての子どもたちとの関わり方や実習した経験が多かった。そして、声のトーンや子どもの注目を集める方法がわかったなどの具体的な援助技法への理解も含まれていた。
- ⑦ 仕事で大事に思っていることは、「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」が最も多く、子どもを第一に考えるや子どもと笑顔で元気一杯に関わることなどの子どもに対する視点が多く、それ以外としては、自分自身が一緒に楽しむことや全体を見ることなどの援助者の視点が含まれていた。

### 第3節 卒業生のインタビュー内容からの考察

今回の卒業生のインタビュー結果からは、学生時代の実習が本人に与える3つの示唆を指摘できる。

第1に、書くことに対する学生と現場職員（指導者）との考え方の違いである。学生の立場では、授業で印象的だったことと実習で辛かったことの両方に日誌の作成と認定保育が入っていた。最近では、書くことは、単なる日々の記録だけでなく、現場での問題が生じた時の証拠として採用されることもあり、記録の重要性が高まっている。その意味で、書くことは、援助する側の権利を守ることにつながることを現場の職員から教わることも多いのである。記録は、コミュニケーションの1つとして考えられるのであり、他の人の目にも触れるという意識から、誰が読んでもわかる記録方法を実践する必要があることを講義の中でも教えられていたのである。

第2に、実習の経験は、仕事に活かされている可能性が高いことである。実習では、①人前に立つことの経験をすることで自信をつけたや援助方法を身につけたなどの自分自身の成長に対する視点、②子ども一人一人の性格や行動の違いなどの子どもに対する視点、③相談相手を持つなどの連携や協力に関する視点の3つがあると考えられる。アンケートの内容でも示されていたが、自分の学生時代の実習を振り返り、このようにすべきだったやなぜできなかったかを思い出すことで、これから保育者を目指す実習生にも指導が行いやすくなっていると考えられる。そのことは、単に実習生への指導だけではなく、働いている自分たちが目指す方向性への示唆にもつながるものである。そのことは、実習に行くことによって、自分自身が変わり、実習での学びや効果は、学生時代よりも、自分が働いてから、改めて、活かされていると全員がプラス面で捉えていることを示すものである。よって、実習は、自分自身を成長させるものであるとして考えることが可能であると言える。

第3に、実習の経験を通して、保育者としての能力への気づきが含まれていることである。広い視点で見ることの大切さやほうれんそうこく（報告・連絡・相談）や子どもを第一に考えることを講義で学び、それを体感できる場が、実習であることに気がついたことは、大きな財産となるのである。

特に、自分がまず楽しむことによって、相手を楽しませることにつながることは、実習が、辛いものである側面を持つ一面で、卒業後も役立つ大きな学びであると考えられる。

ここからは、インタビュー結果に対する考察について述べていくことにする。

#### ① 教育実習の新旧の授業内容について

教育実習Ⅰの新旧の授業内容について検討を行った結果、旧の授業内容では、「職業人としての学び」を達成することに重点が置かれていたが、新の授業内容では、職業人の土台となる「人としての学び」と職業イメージを膨らませることを並行しながら行なっている側面があった。課題としては、現在の学生が抱える自身への信頼の無さ、職業イメージの弱さといった課題をさらに克服できるよう授業内容をさらに進化させる必要がある。

その点では、松永・森川他（2017）が示したアクティブ・ラーニングを導入した学生同士の対話的な話題を促していくことは、本学でのグループディスカッションの重視や模擬授業や教材研究の導入とも大きな結びつきがあると考えられる。

#### ② 卒業生インタビューの分析を通して

今回のインタビューを通して、学生時代の実習が、卒業生本人に与える効果としては、1) 対象者の子どもに関する視点、2) 保育者として持つべき能力（コミュニケーション・記録・行動規範）、3) 他の人とのチームワーク（協力や連携）の3つの学びがある。特に、記録の指導は、授業内容でも重要だと考えられ、時間も多く取られている。このことが、卒業しても、苦勞して学生時代に身につけた能力であり、現場でもそれが卒業生として実感できているのである。学生である当時は、記録の作成を辛いと思っていた実習であるが、卒業後は、自分が現場で活躍する上での価値基準や仕事のやりがいを形成する重要な要素となる。そして、学生時代を振り返ることで、自分の成長と同時に、学生時代にやり残したことを思い出し、初心に戻れるのである。そのことは、指導者として、これから保育者を目指す後輩への指導内容の準備にもつながるのである。

## 第4章 今後の教育実習のあり方に関する課題

### 第1節 教育実習のカリキュラムにもとめられるもの

本学における教育実習Ⅰの目標については、先述したように、①教育実習は、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する授業・実習である。②一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身につけることを設定している。次に、教育実習Ⅱについては、教育実習として遵守すべき義務等について理解するとともに、その責任を自覚したうえで意欲的に教育実習に参加する。②教育実習を通して得られた知識と経験



を振り返り、教員免許取得までにさらに習得が必要な知識や技能等を習得することを設定している。特に、教育実習Ⅱでは、責任の自覚や遵守すべき事項の理解が求められ、教育実習Ⅰでの学びを総括し、さらなる応用や発展が求められるのである。

これからのカリキュラムや授業内容の充実を考える上では、教育機関で様々な表現の基礎的知識や技能や特別な専門知識を学ぶのは、養成施設や養成課程に在籍する学生一人一人であることを忘れてはならないのである。現在の学生の多くは、Z世代の中にあるといわれている。Z世代とは、諸説はあるが、日本では1990年後半頃から2012年頃に生まれた世代であると言われている。Z世代は、デジタルネイティブであり、SNSネイティブ、さらにスマホネイティブでもあるといった特徴を持っている。つまり、SNSやスマホなどのデジタル文化の下で、生まれながらに暮らせている人である。実際、生活の中には、便利なものが多く存在しており、便利さには、困らない世代とも言えるのであり、便利さ優先の傾向が強いと言えるのである。

一方で、Z世代の課題としては、政治のことに無関心であったり、女性のリーダーが少ないことと同様に、人づきあいが苦手である人が多い。自分以外の人に関心を持たないということもあるが、気に入らなければ、次に行けばよいという意識が強く、その場を耐えるという忍耐の部分が弱くなっているのである。最近では、実際の対面ではなく、ZoomやSkypeなどの面接や面談も多く行われている。それは、時間の節約や移動の負担の軽減の効果が多く示されているが、本当の意味での相手を知ることになるとは言い切れない部分もある。その点では、相手を知るためのコミュニケーション方法を多く身につける必要がある。今後は、このZ世代への対応こそが、教員と実習指導者にとっても、大きな課題である。

同じ日本でも、生まれた時代によって人が成長する環境は大きく異なり、それぞれの人格形成や趣味および趣向や考え方に影響を及ぼすのである。環境は、保育者観の形成にも大きく関わりがあるものとして、考える必要がある。その点からすると、在学時において、たくさんの現場を実習やボランティアなどで経験し、保育者としてのコミュニケーション能力の向上や行動規範の形成を学生に学ばせるような取り組みを今後の講義の中で形成していく必要があり、そのことを教員の1人として、これからも私は伝えていきたいと考える。

## 第2節 卒業生インタビューの内容からみえるもの

本節では、卒業生インタビューの内容からみえるものについての私見を述べたい。第1に、実習で自分が辛かったことについては、9名全員(100%)が日誌の作成と回答していた。学生時代の実習では、日誌を書くことが、学生にとっては、かなりの大きな負担や課題となっていることがうかがえた。現在は、日誌だけではなく、文章自体を書くことが苦手な学生が多く存在していることを教員である自分自身も痛感することが多いのである。

第2に、実習で自分が変わったかどうかについては、9名全員(100%)が変わったと回答していた。

その内容としては、「自分自身に自信がついた」や「保育者としての責任感の必要性や何事にもめげない力」や「実践することや挑戦することの大切さや振り返りをし、次に活かせるかを考えるようになった」があった。変わった内容としては、自分自身に対する自信の芽生えと保育者としてあるべき姿を考えられるようになったことが大きいと考えられる。これについては、幼稚園指導要領の内容と合致する部分もあり、講義やカリキュラムの内容が、幼稚園指導要領の中身と一致していると考えられることができる。

第3に、実習で何を学んだかについては、保育の複雑さへの気づきや子どもの一人一人への細やかな声かけと配慮が多かった。それ以外には、先生の意見やアドバイスを聞くことや子どもの目標になることがあった。全体として、保育者として子どもとどのように対応すべきかを学びとした内容が多かったと考えられる。実習は、保育者として持つべきコミュニケーションや気配りのあり方を学ばせるものであるといえる。

第4に、実習の経験が仕事に活かしているかについては、9名全員(100%)が活かしていると回答した。活かしていると感じた内容としては、基本的な子どもの生活習慣を学んだことや保育者として子どもたちとの関わり方や実習した経験が多かった。そして、声のトーンや子どもの注目を集める方法がわかったなどの具体的な援助技法への理解も含まれていた。

最後に、仕事で大事に思っていることは、「ほうれんそう(報告・連絡・相談)」が最も多く、子どもを第一に考えるや子どもと笑顔で元気一杯に関わることなどの子どもに対する視点と同時に、自分自身と一緒に楽しむことや全体を見ることなどの援助者の視点も含まれていた。

以上のことから、教育実習は、子どもと援助者と両方の視点を学生が学ばせることができることが明示されたのである。それを通して、自分自身も成長し、学生時代の経験を実習指導者として、資格を目指す学生に伝えることが必要であるとの認識を卒業生として自覚していることがうかがえる。学生の中には、目指したい援助者がいるから、その施設に就職したいという声を聞くこともあるが、その援助者が卒業生であったことも少なくはないのである。卒業生が在籍する施設に就職することは、現役の学生にとっても、安心できる1つの要素になりえると私は考える。

## おわりに

保育士や幼稚園教諭を養成する施設や教職課程を有する教育機関にとっては、実習指導は、授業の中でも重要な役割を果たすものである。各専門分野の知識を有する教員がそれぞれの科目を担当し、授業の中で各校の実情に合わせた展開が行われているのである。近年では、これまで設定されていた「教科に関する科目」が「領域に関する科目」へと変更されている。

カリキュラムや授業内容については、変化が行われているのであり、2017年に発行された『幼稚園教育要領』では、本文で述べた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目などの実践に

役立つ内容が多く導入されることが求められている。環境との結びつきは、引き続き重視されるが、障害のある幼児や海外から帰国した幼児など特別な配慮を必要とする幼児への指導を充実させるという新たな対象が追加されていることは、これからの教育システムへの課題としてとらえるべきである。

障害のある幼児や海外から帰国した幼児などの特別な配慮を必要とする幼児のためのカリキュラムを現在の講義やカリキュラムとして追加していく上では、まず、障害の種類や海外から帰国した幼児が抱える問題を学生が理解できる機会を設ける必要がある。特に、海外から帰国した幼児が持つ課題としては、言葉を含めた文化の違いや新たな生活環境への適応などが挙げられる。授業の中では、実際の事例を設定し、幼児本人やその両親や相談機関の相談員などの役割を担うグループワークやシミュレーションを導入してみるのも良いと思われる。

これからの講義は、講師側から一方的に教えるのではなく、学生どうしの活動や発表の場を設けることで、他の学生の動きや活動の進め方を見たことによって、多くの学生が、自分自身に足りない面やより視野を広げていく必要性を感じ、実習に向けての自分自身の課題を明確に意識することができるのである。指導する講師の立場からも、講義の中で各学生の特徴（人前で緊張するかどうかや聞き上手であるかなど）も理解することができるのである。

本文で、アクティブ・ラーニングを取り上げたが、学生による活動のみで、すべての学びが完結するとは考えてはならないのである。実際には、現場で、一定期間の働きや活動をしないと身につけられないこともある。例えば、子どもをどのように自分に注目させるかである。経験のある指導者は、子ども1人1人の状況や能力に合わせた個別な関わり方や技術を身につけていることが多い。その前提として、子どもの置かれた環境を多くの側面から理解できる能力が備わっているのである。その能力は、すぐに身につくものではなく、現場での試行錯誤を繰り返して、現在の状況にたどり着いたのである。言い換えるならば、実務経験に裏づけされた「現場の知恵」である。これこそが、現場でしか学べないことである。

学生時代の実習時に、指導者の様子を観察し、それに遭遇したかもしれないが、当時は、日誌を書くことやそれ以外の要因のために、学生自身が見過ごしたことも考えられる。そのことを学生時代ではなく、卒業後に気づいた卒業生も多いはずである。

先述した障害があるや海外から帰国したなどの特別な配慮を必要とする幼児への対応も、現場によっては、すでに経験済みかもしれない。そうなれば、学生は、学校で学んだことと現場での取り組みの違いに目を向けることができるはずである。現場で見る姿は、学校で学ぶ以上のインパクトを学生に与えるはずである。

実習がもたらす効果としては、期間が決められた時間の中で、子ども一人一人に合わせた援助方法を学び、学生が自分自身でできることを1つずつ増やしていったことであり、それが、成長につながったとも言える。卒業生の中には、学生時代の実習の学びや実習したことによる変化を感じることが少ないと答えたケースもあったが、これから自分の成長を感じる場面があるかもしれないのである。このことを、実習生としての立場で、学生のうちに、体感できれば、実習だけの学びではなく、

専門家（スペシャリスト）としての職業意識の確立にもつながると同時に、これから生きていく自分の糧にもなるはずである。

今後は、子どもと援助者の2つの視点から、講義やカリキュラムを構成し、この「現場の知恵」に学生自身が気づける能力を身につけられるようにすることが、教育実習が果たすべき大きな使命であると結論づける。

#### <注>

- (1) 阿部和子他「子どもの生活環境を整えていること」『保育者論』萌文書林、2012年、p.88
- (2) 松永康史・森川拓也・田畑智美・上村晶・北島信子・辻岡和代編「幼小接続を見据えた教員養成の在り方—幼稚園教諭及び小学校教諭免許取得を目指した教育実習指導の課題と展望—」『桜花学園大学保育学部研究紀要16』桜花学園大学、2017年、p.139～159
- (3) 文部科学省編『幼稚園教育要領』2017年（2021年11月17日取得）<http://www.mext.go.jp>
- (4) 文部科学省編『新幼稚園教育要領のポイント』2017年（2021年11月17日取得）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf)

#### <参考文献>

- (1) 阿部和子他「子どもの生活環境を整えていること」『保育者論』萌文書林、2012年、
- (2) 中山美佐編「幼稚園教育実習の意義と目的についての考察—実習生の保育観と不安の変化についての調査から—」『樟蔭教職研究』大阪樟蔭女子大学、2016年、p.55～62
- (3) 松永康史・森川拓也・田畑智美・上村晶・北島信子・辻岡和代編「幼小接続を見据えた教員養成の在り方—幼稚園教諭及び小学校教諭免許取得を目指した教育実習指導の課題と展望—」『桜花学園大学保育学部研究紀要16』桜花学園大学、2017年、p.139～159
- (4) 吉田雅昭・宮田知絵・岡澤哲子編「幼稚園教育実習の効果的な方法について—学生の学びの報告から—」『帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要第4号』帝塚山大学、2019年、p.59～74
- (5) 文部科学省編『新幼稚園教育要領のポイント』2017年（2021年11月17日取得）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385\\_003.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf)
- (6) 文部科学省編『幼稚園教育要領』2017年（2021年11月17日取得）<http://www.mext.go.jp>

（ただ れいこ：准教授）